8 カンニング　9 シヤーペン　10 マジック　11 アフターサービス　12 ベースアップ　13 クレーム　14 クーラー　15 シユークリーム　16 バックミラー　17 ハンドル　18 シルバーシート　19 ナイター　20 ジーパン

日本人が国際社会で尊敬を得るためには、日本の文化について、説明ができることが必要である。国際コミユニケーション能力を養成するとともに、異文化理解を深め、自文化を発信できる日本人のidentityが望まれる。

A man should know something of his own country，too，before he goes abroad.（Laurence Sterne）

日本語とドイツ語を比較してその相違点・類似点を考えるというのは、言ってみればサカナとヒトとを比較してその相違点・類似点を考えるというほど大胆なことです（わたしはもちろん、日本語はサカナで、ドイツ語はヒトだ、などと言っているのではありませんが）。従って、ここではわたしたち日本人がドイツ語を学ぶにあたって、この一点のみを心がければ、たとえ文法的に多少問題があっても、相手に自分の意志を伝達するドイツ語を口にすることができる、というところを簡潔に説明することにします。

例えば、「今日／ガービーは／16時まで／図書館で／勉強します。」という意味内容をドイツ語で表現したい場合に、まず／で区切った語句（文の成分）を日本語（J1）とドイツ語（Gl）を並置してみますと、次のようになります。〈G2文は正しいドイツ語文です。）

Jl：今日／ガービーは／6時まで／図書館で／勉強します。

Gl：heute／Gabi／bis 6 Uhr／in der Bibliothek／arbeiten

G2：Heute／arbeitet／Gabi／bis 6 Uhr／in der Bibliothek.

「6時まで」（bis 6 Uhr）、「図書館で」（in der Bbliothek）など、前置詞bis（「まで」）、in（「……で」）と名詞の結ぴつきについては、この場合無視することにします。すると、日本語文の意味内容の伝達という点について言うならば、このG1文（本当はまだ文ではなく、ただJ文にならって語句を並べたに過ぎません）は、ほとんど100%に近い伝達度を達成しています。つまり、伝達したい意味内容をそのまま（語句の順位を変えないで）ドイツ語語句として表わせば、わたしたちのドイツ語文は（文法的に多少問題があるとしても）、コミュニケーションと言う点では十分に機能を果たしてくれるわけです。G2が正しいドイツ語文ですが、Glとの違いは、文末にあったarbeiten（「勉強する」）が文の成分の2番目の位置に移動して、3人称単数形のarbeitetに変化している点にあります。しかし、意味内容の伝達という点から見た場合には、Gl文とG2文とはほんの5%かそこいらの伝達度の違いしかありません。

同じような例を挙げてみましょう。

J2：今晩／僕は／ガービーと／映両に／行く／つもりです。

Gl：heute abend／ich／mit Gabi／ins Kino／gehen／wollen

G2：Heute abend／will／ich／mit Gabi／ins Kino／gehen.

J2文とG1分の文の成分の順位はまったく同じです。G1文と正しいドイツ語文であるG2文とは、最初の例のarbeitenと同じように、わずかにG1文の文末にあった助動詞wollen（「……するつもり

である」）が、G2では文の成分の2香目の位置に移動し、1人称単数形のwillに変化しているのが唯一の連いです。

極端な言い方になりますが、日本語文J1文あるいはJ2文の最後に置かれる動詞（あるいは助動詞）が、正しいドイツ語文G2文の場合には文の成分の二番目に人称変化して移動するというのが、文の構造上の最も重要な相違点です。ただし、度々指摘したように意味内容の伝達度ということだけを考えるならば、Gl文とG2文（つまり、日本語的ドイツ語文Gl文と正しいドイツ語文G2文）にはわずかな違いしかありません。そして、この違いを埋めるのが文法規則である、と言うことができます。

わたしたちはどんな言語でも（たとえ文法的には多少問題があるとしても）実際に使って、相手に自分の意志を伝達することに限りない喜ぴを感じます。授業ではこの点を特に心がけて、ドイツ語を楽しく学んでください。

花子と愛子の会話。
（道で出会って）
一あら、そのパンタロン、すてきね。
一なかなかシックでしょ。昨日買ったばかりなの。
一そろそろお昼ね。その辺のレストランにでも入らない？
一カフェで軽くすませましょうよ。
（カフェでメニューを見ながら）
一何にしようかな。私は、オムレツとクロワッサン。
一まるで、朝食みたいね。私は、コロッケ定倉、いや、ピラフにしようっと。
（食べながら）
ーオムレツにブロッコリーを添えてあるのはいいけど、マヨネーズをかけてあるのには閉口だわ。マヨネーズ、あまり好きじやないのよ。
ーピラフについてきたこのコンソメ、なかなかいけるわよ。

上の会話のカタカナの部分は、すべてフランス語から入った外来語です。原語を示すと、順番に、pantalon，chic，restaurant，café，menu（ただし、発音はムニユ），omelette，croissant，croquette（クロケット），pilaf，brocoli（ただし、英語起源の外来語としている国語辞典もあります），mayonnaise，consomméです。

このように、日本語の中にはフランス語起源の外来語がたくさんあります。身近な例をもう一つ挙げますと、日本の度量衡制度はメートル法を採用していますが、これはフランスから来ており、メートル（mètre）、グラム（gramme）、キロ（kiIo）、リットル（litre）などの度量衡単位を用いるとき、私たちはフランス語のお世話になっているわけです。

中には、フランス語での意味や用法とは違った用いられ方をしているものもありますが、それはそれで趣があり、日本語の懐の深さとでもいったものを感じさせます。たとえば、ズボンの原語はjupon（ジュポン）です。しかし、この単語は女性がスカートの下につけるペチコートを指しますから、日本人男性は皆、女性用下着をはいて闊歩していることになります。ちなみに、フランス語で「ズボン」を意味する単語は上の会話の中にもあるパンタロン（pantalon）です。男女の二人連れをアベックということがあります。この語源のavecは英語のwithにあたる前置詞で、日本語の